

主体的な活動からコミュニケーションの充実を目指した事例では、2年間に渡って活用と事例検討を継続してきた(図8)。対象児童は、小学部3年生(現4年生)で自立活動を主とする教育課程に在籍している。教員からの言葉かけにより、右腕が肘から前方に10~15cm動かすことができた。担任は生徒の主体的な活動から他者へ働きかける力の育成を目指していた。はじめは、小学3年生時はVOCA(音声出力装置)にダブルクリップフレキシブルスイッチを接続してあいさつをする場面で活用した。教員が動きの援助や言葉かけの支援をして活動する状態であった。事例検討の場を通して、姿勢や活動目的等について検討が行われた。右腕の動きの意識付けや、本児が活動(音声出力)を必要としたり満足を得られたりする活動の設定について、意見が出された。4年生時には、様々な支援機器やスイッチ教材を活用した活動について「ATライブラリー係(研修部)」と話し合い、入力補助具(QスイッチM*1)やスイッチ教材(太鼓たたき*2)などをそれぞれの活動場面で活用し、学習や目的に応じて繰り返し活用するようになった。また、姿勢については、同学年の「ATライブラリー係(自立活動部)」と一緒に活動をしながら改善した。こうしたことにより、本児は意図的にスイッチ操作をするようになり、教員からの賞賛の言葉かけが増えることで、さらにスイッチ操作を通じた学習活動に意欲的になった。課題としていた主体的な活動からコミュニケーションが充実してきたと共に、自らできる活動も増え、タブレット端末に自ら直接触れてアプリで遊ぶことができるようになった。



図8 スイッチ学習型赤外線リモコンを操作する対象児童

※ 本事例(特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例)は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「B-292 特別支援学校(肢体不自由)のAT・ICT活用の促進に関する研究—小・中学校等への支援を目指して—」(平成26年3月)、33-34に記載された内容である。